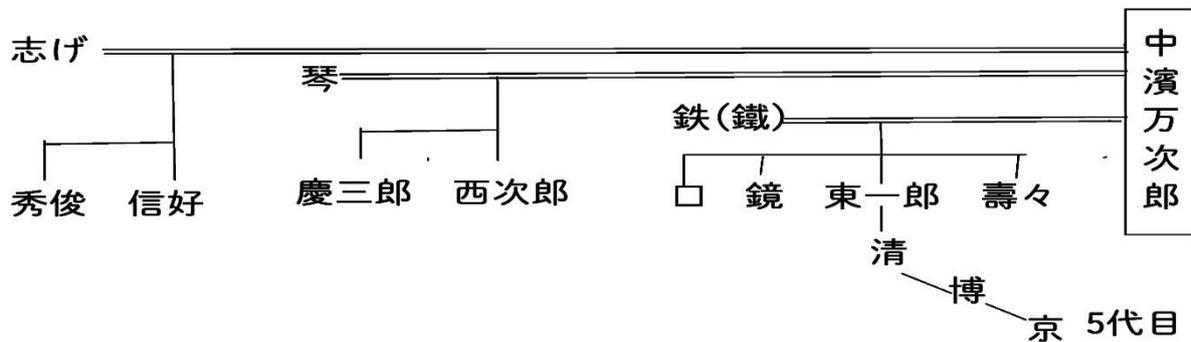


万郎人生の概観⑩ 「咸臨丸で渡米」

(1) 万次郎の3度の結婚

最初の妻鉄が25歳の若さで麻疹に罹患して逝去したことは、前号で紹介した。その後、医師樋口立卓の妹「琴」と再婚し、西次郎・慶三郎の二男をもうけたが離婚した。そして、晩年に「志げ」と3度目の結婚をして、信好・秀俊の二男をもうけた。このように離婚と再婚を繰り返すことは、当時の日本人の結婚観とはかなり異なるものであった。



(2) 軍艦操練所教授となった万次郎

幕府は、安政二年(1855)に長崎に海軍伝習所を設置した。海防のための人材育成を目的とした教育訓練施設である。これらの教授陣はほとんどが外国人であった。また、安政四年(1857)4月に江戸築地の講武所内に軍艦操練所が設置された。これにより長崎の海軍伝習所は廃止され、築地の軍艦操練所は講武所から独立し、そのウエイトが大きくなる。

万次郎は、この軍艦操練所の8人の教授陣の一人であった。学生等は、米国で教育を受け、当時最新の知識を持つ万次郎から積極的に英語・数学・航海術を学んだ。安政六年(1859)7月27日～10月22日までの万次郎が短期間記録していた日記を見ると、英語を習いに来ていた学生は「細川潤次郎」「大鳥圭介」「箕作貞次郎」「根津銀次郎」等の氏名が散見される。ちなみに細川潤次郎は、幕末の土佐藩士で明治～大正時代に法制学者・教育者として活躍する。司法大輔・貴族院副議長の要職にも就いた。日本の近代法導入の功績に関して江藤新平とともに高く並び評されている。

万次郎の日記には氏名がないが、榎本武揚・大山巖・福沢諭吉・岩崎弥太郎・西周等にも英語を教えていたと伝えられている。このように万次郎は、幕末から明治維新にかけて激動期の日本を支えた有能な人材を地道に育成していった。

(3) 万次郎の咸臨丸への乗船

日米和親条約により米国総領事のハリス(Townsend-Harris)が下田に駐在。安政五年(1858)6月19日、品川沖のポーハタン号艦上で下田奉行井上清直、海防掛目付岩瀬忠震

とハリスとの間で条約調印が行われた。その後、条約批准交換のため日本側代表の使節団は、ワシントンに行かなくてはならない。米国は軍艦ポーハタン号で日本使節団を送迎することを決めた。一方、日本側も日本からサンフランシスコまでポーハタン号の随行船を派遣することになった。日本側は検討を重ね、随行船を咸臨丸に決めた。

咸臨丸は、安政三年(1856)にオランダのホップ・スミット造船所(旧名称)に発注して建造させた軍艦である。排水量 620 トン、全長 48.8m、幅 8.74m、深さ(キール仮面から上甲板仮面まで)5.6mである。木製のスクナー・コルベット型の軍艦で砲を 12 門積載し、百馬力の蒸気機関でスクリューを備えていた。

万次郎は通訳として乗船者候補であったが幕閣の中には、未だに万次郎が米国に有利な通訳をするのではないかと、スパイとならないかなどという懐疑の心を持つ者もいた。これを軍艦奉行木村撰津守が万次郎の同行する意義を再三にわたり理を尽くして説明し、出発の二週間前にやっとのことで咸臨丸への乗船が決定した。

米国の測量船フェニモア・クーパー号のブルック船長等 21 名が日本近海で難破し、ちょうど横浜で米国行きの船待ちをしていた。咸臨丸は操船が日本人ばかりで乗船経験がなく、軍艦奉行木村撰津守は、航海に熟達した米国人を 1~2 名乗船させたいと考えており、まさに双方にとって「渡りに船」であった。フェニモア・クーパー号乗員 21 名中 11 名が咸臨丸に乗って太平洋を渡ることになる。

木村撰津守家来・斎藤(森田)留蔵の記した『亜行新書』によると、太平洋上の外洋に出た咸臨丸は大波に揉まれ、日本人乗員のほとんどが船酔いしたと記している。咸臨丸が横浜港を出港(2月10日)し、翌日(2月11日)明け方から風が激しく、甲板に波飛沫が被り、波濤の高さも 12~15m、うねりで船も 27・8 度も傾いたという。日本人のほとんどは、船酔いで動けず、乗船していた 11 名の米国人に介抱されなければならなかった。唯一船酔いしていない日本人は「中浜万次郎(軍艦操練所教授方出役・普請役格鉄砲方配下手代)」「小野友五郎(軍艦操練所教授方出役・牧野越中守家来)」「浜口興右衛門(軍艦操練所教授方出役・浦賀奉行配下同心)」の 3 人のみだった。

万次郎は、嵐の船中で「若かりし頃、捕鯨船に乗っていたときのことを思い出して、搭乘していた年配の米国人と一晩中思い出話に花を咲かせていた」とブルック船長の日記に綴られている。

2月25日(現地時間3月17日)、咸臨丸は無事サンフランシスコに入港した。38日間にわたる多難な航海であった。万次郎は 10 年ぶりに北米大陸の土を踏んだ。サンフランシスコ港は一度金鉱掘りで訪れている。咸臨丸は、3月23日から5月1日までメアー・アイランド海軍工廠でドック入りした。サンフランシスコで一行は、市長をはじめたくさんの市民に大歓迎を受けた。その模様はまた別の機会に紹介することとする。5月8日、サンフランシスコ港を一行は出港した。

5月23日ハワイ・ホノルル港へ寄港。万次郎は勝海舟らと公務で上陸し、その後、恩人デーモン牧師との再会を果す。5月25日、咸臨丸の最高責任者・木村撰津守は、現地のカメハメハ国王に接見している。王宮には吉岡勇平政成(軍艦操練所勤番)とともに万次郎が同行している。恐らく万次郎は通訳として随行したのだろう。万次郎はそのあと再びデーモン牧師のもとを訪れ、ホイットフィールド船長宛の手紙を書き、それを牧師に託している。5月26日、一行はハワイ・ホノルルを後にした。

往路に比べて復路の航海は極めて順調であった。万延元年(1860)6月23日、咸臨丸は無事浦賀港に投錨した。6月24日、浦賀港から横浜港へ、その夜万次郎は自宅に帰宅した。ポーハタン号に乗船した使節団よりも、随行船咸臨丸に乗船した万次郎たちの方が、優秀で後に名を残す人が多かった。そこが歴史のおもしろさである。 …続く